

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：33908

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25511016

研究課題名(和文)奄美における文化の伝承・創生のメディア的展開とアイデンティティ形成に関する研究

研究課題名(英文) Study on Development of the Traditional Culture by Media, and Identity Formation in Amami.

研究代表者

加藤 晴明 (Kato, Haruhiro)

中京大学・現代社会学部・教授

研究者番号：10177462

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：(a) 文化媒介者に関する実証面の研究成果として、喜界島・奄美大島の主要な島唄・八月踊りの伝承が、集落ではなく、ミッションをもった文化媒介者=広義の地域メディア事業によって伝承されていることを調査し論考にまとめた。またメディア媒介的展開にかかわる資料面での成果として、奄美群島における唄の伝承にかかわる公民館講座の一覧・受講者数の推移・奄美歌謡の年表、そして奄美の文化メディア史を作表した。(b) 理論構築面での研究成果としては、文化媒介者、地域メディアの総過程、表出の螺旋などのキー概念をつくることで、既存の地域メディア理論を超える新しい地域メディア研究のパラダイムを提起した。

研究成果の概要(英文)：As result in the proof study on “culture mediator”, in Kikaijima, Amami-oshima, I investigated that the tradition of the fork song and dance were handed down by the area media business not a traditional village. We named “the mediated cultural project” which had a mission. As result in the study on mediated development of traditional culture, I listed the public hall lecture of the tradition song and dance in the Amami group of islands. And I produced a chronological table and the history of “cultural mediator”.

As results of research on the theory construction side, I submitted the paradigm of the new area media study more than existing area media theories by making the key concepts such as “spirals of the expression in a media activities”, “a total process of the local media”.

研究分野：社会学

キーワード：地域メディア 地域文化 文化変容 地域アイデンティティ 奄美

1. 研究開始当初の背景

本研究を始めるにあたって背景となっている現状認識は2点であった。1点目は、対象となる奄美における伝承文化の急速な変容である。本研究では、それをメディア的展開という語彙で表現してきた。2点目は、そうした地域固有の伝承文化のメディア的展開という現代的な変容に対する既存の学問の立ち後れであり、新しいパラダイムの構築を模索する必要性の認識である。

この1点目と2点目は密接に結びついている。つまり文化の変容という実証研究を踏まえた理論構築が必要であると同時に、変容を捉えるための理論フレームの革新が求められているということである。地域・文化・メディアを連環させた研究が必要だという本研究の問題関心もそうした認識から始まっている。

今日の奄美では、多様な地域のメディア実践を通じて、島の人々自身による文化的アイデンティティをめぐる情報発信が盛んになっている。島口(いわゆる島の方言、今日では奄美語として語られる)、島唄、島の様々な音楽(奄美歌謡、奄美ポップス)、島の料理、島のクラフトなどを通じて、島の固有性が強く語られてきている。そうした奄美という地域での自己文化の語りと文化的アイデンティティ形成のもっとも強力な担い手のひとつが、島に溢れるメディアとその産物であるメディアコンテンツである。文化をメディアと連関して研究する理由もそこにあった。

従来、奄美のような伝統的な固有文化を色濃く残している地域の文化研究は、伝承されてきた文化の原像(オリジナル)を発見し、その衰退や継承の困難さや変容に対して警鐘をなげかけて終わることが多かった。奄美固有の唄文化である島唄の場合にも、多くの研究書が出版されてきたが、ほとんどが解説学・分類学にとどまっている。

島唄などの文化を、誰がどのように、つまりいかなるツールやシステムを使って伝承しようとしているのかという、担い手=媒介活動に関する研究は極めて限られ、付随的な形でしか論じられないでいた。

実際の島唄伝承の現場では、レコード化・ステージ化・標準化が進んできている。かつては、集落の根ざした共同体の娯楽文化であったものが、いまでは習いごとによる文化=教室=クラブ文化となってきた。伝承の形の変容は、島唄自体の変容ともつながり、島唄もいわば島唄内部でのポピュラーソング化のような状態が進行しつつある。つまり、伝承文化は、メディア的展開を通じてひとつの現代文化ともいえる段階に達しているのである。だから今日の島唄ファンは都市の高学歴文化消費者が多いともいえる。

しかしながら、従来の文化研究は、こうした変容に焦点をあてないでいた。文化研究は、若者文化研究・ネット文化研究などの狭い領

域に特化し、他方で、民俗学・民族音楽学、人類学はそうしたメディア的展開という視点をもたないために、こうした現代的な継承と創生の側面を正面から実証的にも理論的にも捉えられないでしまったのである。

こうしたメディア的展開という変容は、メディア研究の側からもっと提起され研究されてよいはずであった。しかし、地域のメディア研究は、その地域メディアが地域のなかでどのような文化をどのように媒介しているのかという具体的な実証研究に踏み込むことなく、ケーブルテレビ、コミュニティFM、地域音楽産業といった業界種別の先進事例の紹介に終始してきた。NPO放送局や震災メディア、さらにはネットでの情報発信者など、メディア事業の形にのみ焦点をあててきたのである。

つまり地域に根ざした文化研究と地域メディア研究は、個々には研究の膨大な蓄積を生み出しつつも、両者をつなぐ研究が不在だったのである。そのため地域の文化の現代的な変容を実証的にも解明することなく、また理論的なフレームを革新しないでできてしまったのである。

地域の文化研究とメディア研究をつなぎ、地域における多様な文化を継承・発展させるメディア的展開という動きを実証的・理論的に捉えていく研究が皆無に近いなかで、奄美という特定の地域に根ざしてそれを試みることが、本研究の背景と関心の起点であった。

2. 研究の目的

上記のような背景をもとに、本研究では、文化の伝承・創生とメディアとの結びつきの中なかで、その地域のアイデンティティが再構築されていくこと。そして、この文化とメディアの結びつき=いわば、文化のメディア的展開を、今なお濃厚な伝承文化を抱えている奄美の唄文化を対象に検証することが目的であった。

それは、地域研究と文化研究を連環させる試みでもある。奄美群島を対象に2つの領域の従来の研究の蓄積を踏まえつつ、文化研究とメディア研究の両翼の裾野を拡大することで、多様な文化媒介者=広義の地域メディア研究の発展をめざすことである。

また、このように地域文化・メディア・アイデンティティの連環という普遍的な主題を研究することは、文化伝承論の分野においてメディア文化研究が貢献する余地を拓くことをも意味する。なぜなら、こうした地域文化・メディア・アイデンティティの連環は文化研究の現代的な主題であるからであり、奄美のように、ヤマト文化と琉球文化の狭間で固有の文化を育み、それを根強く残している奄美群島のような地域こそが、それを考察するのに最も適した地域といえるからであった。

具体的には、以下のようなことを明らかに

することを旨とした。

(a) 多様な文化媒介者 = 広義の地域メディアの総合的な配置図の発見と整理

奄美の唄・音楽芸能に対象を絞りながら、文化媒介者の全域的な配置図 = 広義の地域メディア像を発見し整理する。従来のマスコミ系の地域メディアだけでなく、ライブハウス、音楽レーベル、音楽イベント、島唄・民謡教室、島唄大会・歌謡大会、楽器店など、文化媒介者の範囲を拡大しながらその全員を発見・整理する。

この総合的な配置図には二つの範囲が含まれている。一つは、従来のマスコミ・メディア産業などの俯瞰図。いったい奄美にはどのようなメディアが、これまで歴史的に存在し、現在配置されているのか。奄美には、離島の割には沢山のメディアが次々に生まれる、メディアが沸き立つ島だからである。もう一つは、文化媒介者という視点を入れることで、既存のメディア事業（出版・放送など）にとらわれない、文化を伝承・創生する営みを広義のメディアとして捉えて、その配置図を整理することである。公民館講座における教室などもこうした文化媒介者に属することになる。

こうした二つの範囲を視野にいれたのは、本研究の特色・独創性でもある文化のメディア的展開という視点の有効性を確認するという目的があったからである。それによって、レコード化 ステージ化 標準化を担うメディア事業者を広い視点から捉え、単なる民俗文化の継承ではなく、現代的な文化の継承・創生を視野に入れた広義の伝承論や文化変容論が可能になることを検証することができるからである。

(b) 多様な文化媒介者たちの担い手像・営み・課題の発見と整理

多層な文化媒介活動は強いミッションによって営まれている。そうした強いミッションをもった文化媒介者が具体的にどんな活動を展開しているのかを現地調査にもとづいて整理する。担い手にインタビューするだけでなく、その文化メディア活動の現場・会場に足を運ぶ。この営みは、唄・音楽文化を媒介にしたメディアによるアイデンティティ形成の営みとも重なり合う。またそのソーシャルキャピタルにも注目し、ある地域社会の人間が文化媒介者になりえる諸条件を析出することも研究の目的であった。

文化媒介者の視点は、(a)の目的とも係わって本研究の大きな特色・独創性である。これまで、島唄・奄美歌謡の伝承・創生者たちの研究は皆無であった。担い手たちの実態を具体的に可能なかぎり網羅的に取材し、そのライフストーリーやミッションを読み説くことをめざした。

(c) 文化の今日的伝承・創生にかかわる奄美の固有性の発掘と一般的な理論モデル化

上記の(a)(b)を基盤にしながら、奄美における文化の伝承・創生のメディア的展

開の固有性を明らかにすると同時に、他の伝統文化の今日的展開に適用できる汎用モデルとして紡出する。

(a)(b)を踏まえて、単なる実証研究ではなく、広義の地域メディア論ともいえるメディア研究の理論の拡張・構築を目指した。つまり、マスコミの業種に焦点を当てた地域メディア研究ではなく、また地域メディアという固有の種類を限定するのではなく、文化のメディア的展開や文化媒介者の視点を導入することで可能となるような新しい“地域の”メディア研究と“文化の”メディア研究の構築を目指したのである。

3. 研究の方法

本研究の方法は、基本的にはインタビューと資料収集、そして各種の島唄・歌謡文化イベントへの参与観察であった。

(a) 人と事業へのインタビュー

ケーブルテレビ、コミュニティFM、音楽産業関係者その他、印刷メディアからネットにいたる、いわゆる情報メディア事業関係者へのインタビュー。そして、本研究で文化媒介者と名付けた多様な文化の伝承・創生に係わる多様な人々を、文字通り地域のなかで発見しながらインタビューすることを繰り返してきた。

25年度から3年間の中で、奄美大島、喜界島・徳之島・沖永良部島・与論島と奄美五島全島の主な文化媒介者にインタビューすることができた。各島で、誰が、どのような文化媒介活動を展開しているかをある程度俯瞰することができた。

(b) 文化教室・発表イベントへの参与観察と公民館講座での唄関係事業の網羅

(a)のような情報メディア事業や文化媒介者のインタビューに加えて、実際の島唄教室の様子や発表会の様子に関しては、現場への参与観察をおこなった。奄美大島・喜界島の代表的な島唄教室の現場を取材することができた。

また島唄の大会、奄美歌謡といわれるご当地歌謡曲の大会、さらには、2015年にちょうど開催された鹿児島国民文化祭でのイベントなどにも参与観察の手法で研究することができた。

また、各自治体の公民館に協力を求め、公民館の島唄・音楽関係の講座の一覧と過去4年間の講座生徒数の一覧のリスト作成という形で数量的な方法による資料収集も試みた。

(c) 文献・メディアコンテンツ収集

奄美の唄文化に焦点をあてていることから、奄美の島唄・奄美歌謡・奄美のポピュラー音楽についてある程度の理解が必要である。こうした点から、奄美のうた文化に関する文献収集以外に、実際の音源などを視聴し、奄美の歌文化そのものに詳しくなる必要があった。そのためCDやDVDなどの視聴覚資料を収集し奄美の歌コンテンツそのもの

にある程度精通することを試みた。

また唄文化も含めて、奄美がこれまでどのようなイメージをもって表象されてきたのかを知るために、奄美に関する映画・映像作品・テレビ番組なども収集した。こうした映像コンテンツに関しては、カルチュラル・スタディーズの視点や記号分析の技法を用いた分析を試みた。

4. 研究成果

(a) 文化媒介者 に係わる実証研究上の成果

奄美群島内部で、島唄教育が盛んな喜界島と奄美大島に関しては、島唄・八月踊り等の文化媒介者 に関して「奄美群島・喜界島と文化メディアーター」(2013)、「奄美大島の唄文化と文化メディアーター」(2014)としてまとめることができた。

喜界島の場合には、民謡全国大会優勝者をはじめ、1000名の弟子を送り出した安田教室に加えて、多様な文化媒介者 を発見・網羅した論考をまとめることができた。集落に準拠した島唄文化の伝承に係わる文化媒介者 や、集落に根ざしたシマ唄の音源を集めてCD保存を試みているグループや、全集落の八月踊り唄のDVD作成に係わるプロジェクトの活動などである。

奄美大島では、北部のカサン系島唄教室の中心的主宰者から南部のヒギヤ唄系島唄教室の代表的な主宰者、そして八月踊り唄の子供達への伝承に係わる主宰者と、現在島で最も活躍している三つの文化媒介者 をとりあげることができた。

以上の文化媒介者 群に対しては、複数回のインタビューを繰り返すことで、活動の単なる紹介ではなく、そうした文化媒介者のライフストーリーや文化媒介に係わることになる転機やミッションなど担い手の社会意識に分け入って解明することができた。

また、こうした実証研究を通じて、地域固有の文化や伝統文化は、長期的な視点で見れば琉球弧内やヤマトとの交流性をもって、今日では自然村に準拠した文化から離脱し、文化媒介者 = 広義のメディア活動によって伝承・創生されている点などを実証的に確認することができた。これらの点は、研究成果の論考に盛り込まれている。

(b) メディア媒介的展開 に係わる資料面での成果

文化媒介者 の発掘・発見の作業のなかで、各自自治体における公民館講座に着目し、そのなかの島唄・八月踊り・奄美歌謡などの文化講座の一覧と2011年から2014年の4年間の生徒数の推移の把握を行った。公民館講座一覧表「奄美群島の島唄・三味線・八月踊り・奄美歌謡関係の公民館講座の一覧」として作表した。

さらに個別具体的な事例として、奄美固有の文化として島唄が注目されるようになったのが最近の現象であることを可視化する

ため、龍郷町の講座の推移を検証し作表した。それにより、1990年代以降、つまり平成になってからの講座の急増という実態を把握することができた。この作表により、改めて島唄の隆盛自体が、テレビの民謡大会での日本一獲得などの出来事を介在としたメディア的展開 過程であることを検証することができた。

奄美歌謡についても、ほぼ全曲について作詞・作曲の年表を「奄美歌謡の年譜」として作表した。これにより、新民謡から奄美歌謡への転換や隆盛を可視化することができた。この大衆歌謡の文化も、奄美歌謡選手権や奄美紅白歌合戦などのメディアイベントと相乗作用をしており、基本的に平成になってからの隆盛であることが検証された。

奄美のメディアと関係する文化の歴史を年表化し、「奄美文化メディア史」を作表した。これは、出版・メディア事業と島唄・奄美歌謡・奄美のポップスまで範囲で、文化媒介者 の誕生年・没年・大きな出来事などを時系列化した表である。今回の作表は研究期間(3年間)で収集したデータのみを入力してあるが、さらに詳細なメディア文化史作表へのベースとなるものであり、今後の奄美の文化研究に貢献する資料でも考えられる。

メディア的展開 という切り口の背景を理解するため、情報媒介に絞ってではあるが、奄美におけるメディアの総体を歴史的に遡りながら俯瞰した。歴史・出版メディアに関しては、「奄美の地域メディアを俯瞰する・歴史・印刷メディア編」(2016)として発表した。論考では、現代だけではなく、明治期以降の新聞や出版の歴史も含めて、また現在廃業しているメディア事業も含めて、奄美のメディアの総俯瞰図を可能な限り詳細に描写することができた。これまで市史や各種エッセー本などで個別に論じられてきた奄美メディアの歴史を統合して論じた初の試みである。

最終年度では、奄美に関する映像作品の中で島唄や奄美歌謡、さらに奄美の伝統文化がどのように描かれているかの詳細な記号分析を試みた。こうした分析には、研究代表者の社会調査実習を履修している学部生も動員した。それにより、現在入手可能な大半の映像作品の中の奄美イメージの記号分析と解読を試みることができた。成果は、報告書『映像の中の奄美・生活の中の奄美』として刊行した。「新日本風土記奄美」(2016)の章は研究代表者が担当している。

こうした成果の一部は、奄美研究のブログである「かとはるラボ@奄美」で公開している。

(c) 理論構築面での研究成果

本研究は、実証面での研究にとどまらず、従来の地域メディアの理論を再構築するという意図のもとに始められている。このため、奄美に準拠しながら従来の地域と文化の理

論を再考する研究も平行しておこなってきた。「自己メディア論から地域の自己メディア論へ」(2015)、「奄美・島語りメディアに満ちた島」(2015)、「地域メディアを再考する」(2015)、「奄美の地域メディアを俯瞰する：歴史・印刷メディア編」(2016)がその成果である。

研究成果では、研究当初予定していた文化メディア学をより精緻化させ、「地域のメディア社会学」「文化のメディア社会学」という二つの視点を導入した。また物語論の理論パラダイムを援用することで、「島語りメディア」「自己コンテクスト性」「地域メディアの総過程」「表出の螺旋」など新しい説明概念群を開発することができた。さらに、それらの概念を奄美での実証分析に適用することでその概念的な有効性を検証した。

以上のような理論的考察により、業界別メディアにのみ着目する狭義の地域メディア論や近代化以前の事例発掘に焦点をあててきた従来の民俗研究などの臨界を超える新しい理論フレームをある程度整備することができた。近年では、民俗学研究においても、メディア的展開の重要性が指摘されつつあり、本研究はその意味でも先駆的な試みであるといえる。

なお、当初、群島全域の調査を企画していたが、奄美における文化媒介者が予想以上に多いことや複数回取材の必要、さらに理論研究に時間がかかったことなどから、群島全域の文化媒介者の網羅に到達することはできなかった。論考として発表したのは、喜界島・奄美大島にとどまった。残された課題は、研究代表者が再び代表者となって2016年から3年間の予定で始まる新しい研究「奄美における文化のメディア媒介的な伝承・創生とアイデンティティ再生の研究」(科研基盤研究C)に継承される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 8 件)

加藤晴明、奄美の地域メディアを俯瞰する：歴史・印刷メディア編、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第9巻第2号、2016、47-128

<http://nc.chukyo-u.ac.jp/gendaisyakai/kiyou/>

加藤晴明、新日本風土記・奄美、メディア文化研究、査読無、第20号、2016、79-103

加藤晴明、自己メディア論から地域の自己メディア論へ、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第9巻第1号、2015、2-32

<http://nc.chukyo-u.ac.jp/gendaisyakai/kiyou/>

加藤晴明、奄美・島語りメディアに満ちた島、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第9巻第1号、2015、33-66

<http://nc.chukyo-u.ac.jp/gendaisyakai/kiyou/>

加藤晴明、地域メディア論を再考する、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第9巻第1号、2015、67-114、

<http://nc.chukyo-u.ac.jp/gendaisyakai/kiyou/>

加藤晴明・寺岡伸悟、奄美大島の唄文化と文化メディアエーター、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第7巻第2号、2014、93-126

加藤晴明、喜界島と文化メディアエーター、榕樹、査読無、第30号、2014、130-135

加藤晴明・寺岡伸悟、奄美群島・喜界島と文化メディアエーター～文化メディア学の視点から～、中京大学現代社会学部紀要、査読無、第7巻第1号、2013、29-58

[その他]

ホームページ等

かとはるラボ@奄美

<http://katoharulabo.amamin.jp/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

加藤 晴明 (かとう はるひろ)

中京大学・現代社会学部・教授

研究者番号：10177462

(2) 研究分担者

久万田 晋 (くまだ すすむ)

沖縄県立芸術大学・付置研究所・教授

研究者番号：30215024

寺岡 伸悟 (てらおか しんご)

奈良女子大学・文学部・教授

研究者番号：90261239